

葛飾区史編さんだより Vol.12

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 26 年 12 月 20 日 (土) 午前 10 時から、新小岩北地区センターにて「昭和の葛飾を伺う会」が開催されました。

多くの方にご参加いただき、新小岩北にまつわる様々なお話を伺うことが出来ました。



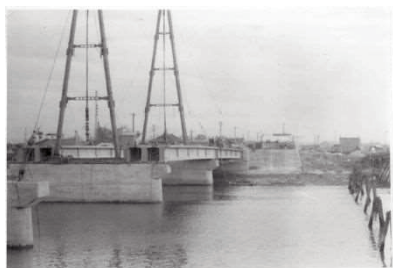
こんにやく橋

新小岩北地区センターの傍ら、いまは道路と公園になっているところに西井堀が流れていました。西井堀は水元公園を水源とする農業用水で、旧上小松、上平井の水田を灌漑していました、

この西井堀に、こんにやく橋という名前の橋が架かっていました。人が通るとゆらゆら揺れて、まるでこんにやくの上に載っているようだというので、「こんにやく橋」という通称が付いたのだといわれています。戦時中、軍需工場になった大田鉄工所を建設するときに、西井堀に架けられた橋のうちのひとつだそうです。

このこんにやく橋の付近には、かわうそが出るという噂もありました。四手網や押し網でとった魚が、いつのまにかいなくなってしまうことがときどきありました。これは西井堀にすむかわうそが、人間の隙をついて魚を食べてしまったからだということです。今ではビルが立ち並ぶ新小岩も、人の暮らしと水辺の距離が近かったころは、かわうそが出没するゆとりがあったようです。

魚とり ～電氣流し～



西井堀や上小松、下平井のあちこちに無数にあった池では、さまざまな方法で魚とりが行われ、昭和 20 年代までは人々の蛋白源になっていました。工場などを建設するとき、用地を整備するために掘った穴が池のようになり、いつのまにか雷魚が棲みついていたそうです。

職業漁師もいて、現在の平和橋(左図は工事中の写真)付近で投網を打ち、鯉やナマズをとって付近に作ったいけすに入れている風景も昭和 30 年頃までは見られました。川魚が日常生活の中にしっかりと存在感を持っていたことがわかります。さて今回、四つ手網や押し網といった定番の方法以外に、ちょっと変わった魚とりの方法をお聞きしました。

それは水辺近くに立っている電線のはだかの部分から針金や金属の棒などを使って電気を分流し、池のなかに流し込んでショックを与え、鮒や鯉を気絶させるというものです。

電気の通った二本の金属棒を流し込むと、それを+とーの極点として、その間を電気が流れていきます。電流はその間だけを流れるので、たとえば周囲で子供が泳いでいても感電することはなかったということです。

「電氣流し」という方法で魚を取ることは実はあちこちで行われていたようですが、たいへん危険な方法でもあり、法律で罰せられます。くれぐれも真似をしないように。



ふのり作り

上平井のふのり作りは江戸時代に始まり、全盛期には全国生産の半分近くのみを生産していました。大正時代には 20 軒のふのり生産者がいました。ふのり作りは 6 月から 9 月までの季節仕事なので、そのほかの季節は農業をしていました。

ふのりは着物の洗い張りなどに使う生活雑貨で、昭和 20 年代までは多くの需要がありました。海藻のフノリを材料にして作ります。

「二合半領」といった埼玉県三郷市、吉川市の人たちが田植えを終えると、このふのり作りの出稼ぎにやってきます。夏の間、住み込みで働き、稲刈りの季節になるとふのり作りも終わり、帰っていきます。

夏の季節の風物詩であった上平井のふのり作りは、平成 5 年頃まで行われていました。

蔵前橋通りの進駐軍



(完成した頃の蔵前通り)

太平洋戦争後、蔵前橋通りにはアメリカ軍の部隊が進駐し、一時期キャンプを張っていました。

昭和 20 年の暮れごろには、3 張りのテントが現在の松永病院の前に作られ、その部隊の兵士たちがジープで蔵前橋通りを行き来していました。これらの部隊の兵士たちは、キャスリン台風のときに救援に活躍するなど、地元の人たちとのつながりもありました。

子供たちはガムやチョコレートを貰っていましたが、最初は「毒が入っている」と止められたそうです。やがてアメリカ兵と親しむようになると、競ってお菓子を貰うようになりました。

当時の日本にはまだ少なかったチョコレートの味は、子供たちに世の中が変わったことをリアルに実感させたのかもしれない。

金魚池

江戸川区は日本三大金魚産地として全国に知られていますが、実は葛飾区にも金魚の養魚場が多くありました。「雨が降って大水が出ると金魚池があふれ、なかの金魚が逃げ出してあちこちで泳いでいた」という話はあちこちで聞くことが出来ます。とくに多かったのが渋江、木下川(東四つ木)と、上平井(西・東新小岩)でした。なかでも上平井の金魚養殖は都市化が進んだ現在も続いている点が特筆すべきであると思われます。

昭和 12 年の地形図を見ると、現在の平和橋通りに沿って金魚池と思われる池が点在しています。これらの池で金魚の養殖をしていた業者は 3 軒ありました。

東京の金魚養殖は、もともと江東区深川を中心とする地域で行われましたが、大正時代に江戸川区を中心とする水田地帯に移転してきました。上平井などの金魚養殖も、そうした経緯で行われるようになったものと思われます。粹で優美な江戸前の金魚はいまも健在です。

風船爆弾

太平洋戦争中、風船爆弾という兵器が作られていたことは良く知られています。千葉県九十九里浜から巨大な気球につけた爆弾を季節風に乗せて太平洋に向けて飛ばし、アメリカ西海岸を攻撃しようというものです。

風船は和紙を使い、こんにやく芋を使って貼りあわせました。この風船爆弾の一部を上小松の工場で作っていたということが、今回の「何う会」で判明しました。この工場はもともとゴム工場でしたが戦時中軍需工場となり、風船爆弾の製造にも携わっていたようです。今後、詳しくこの事実関係を調査していきたいと思えます。

上平井、上小松には大田鉄工所をはじめ那須アルミ、大同製鋼、大成加工など大きな工場もあって戦時中は軍需工場化していたことから米軍の爆撃の標的になり、昭和 20 年 3 月 4 日には大きな被害がありました。爆撃にきた B29 が奥戸小学校付近に墜落したのを見に行った人もいました。

戦後、こうした爆撃のときに落ちた焼夷弾の信管を抜いて燃料だけを取り出し、ぼろ布に浸して燃やし、ご飯を炊く人が多かったそうです。